

## 小説半導体戦争（十一）

杉田望

### 1 1 逆転

1  
日興製作所の大竹会長の執務室では、さきほどからくりかえして、同じことが議論されている。会議が始まって、すでに四時間は経過しようとしていた。

今日の坂本社長は、珍しく大竹会長に対してハッキリとものをいっている。大竹会長は赤ら顔を歪め、声をあげて坂本社長に反論を加えているところだった。出席者は大竹会長とそのはす向いに座る坂本社長のほか、渡辺副社長と佐瀬常務の四人である。

通産省の勧告に応じて協定に調印するかどうかで、日興製作所の最高経営会議は、幾度となく議論をくりかえしてきた。

説得のために、田所官房長が直接日興本社に乗り込んできたこともあった。日興側から対応に出だしたのは、ここにいる四人だったが、あのとときの渡辺副社長といえば、憐れなほどに態度が卑屈だった。渡辺の態度を見て、これは交渉相手ではないと思ったのか、田所は佐瀬の顔を見ながらいった。「あなたが、佐瀬常務ですか……」

「そうです」

そして、佐瀬は田所の説得の論理にことごとく反論を加えた。それを大竹会長と渡辺副社長の二人がおどおどしながら見守っていた。

「国益のためです」

田所は最後にそういった。

「国民あつての国益ではないですか」

おだて上げられることに慣れている高

級官僚は、正面から反撃を加えられると意外に脆かった。佐瀬の反論に田所はたじたじになっていた。



たいした人間ではない　　佐瀬はそのとき、田所のことをそう思った。ワシントンで日米間に秘密協定が成立して、まもなく一年になる。この間、日興製作所のなかでは協定調印に傾く議論が沸き上がり、そのたびに激しい議論がくりかえされてきたのだ。ともかく今日までは持ちこたえている。

それにしても佐瀬は頑張ってきた。

大竹会長が動揺しているにもかかわらず、社長の坂本は今回だけは自説に固執している。坂本社長も佐瀬と同じ立場に立って頑張っているのだ。だが、確実に内外の包囲網は狭められてきている。坂本行長にも疲れがみえる。

「これ以上、結論を先送りすることはできません。会社の危機を救うためには、協定を受け入れるしかないのです」

渡辺副社長は最初から喧嘩腰である。どうしても今日は結論をだすぞ、という覚悟のようだ。

「興業銀行も再三にわたって、協定を批准するように勧告してきている。吉海頭取か今日みえられるのは、たぶん、最後通告を持ってこられるのではないか。興業銀行までがうちを見限ることになれば、これは倒産を覚悟しなければならぬ。事態は深刻なのです」

渡辺副社長は、しかめ面をしてそういった。

興業銀行は日興製作所の主力銀行だ。興業銀行が融資打ち切りという非常手段に出てくる背後には、通産省の意向が働いていることは確かだった。しかも今回が始めることではない。興業銀行はいつになく強硬だった。今日の午後には吉海頭取自身が出向いてくるという。渡辺副社長にいわれるまでもなく、興業銀行側が最後通告を突きつけてくることは容易に予想できることだ。

状況から判断して、最悪の場面を想定しておかなければならない。

現在の危機の状況を一番よく知っているのが佐瀬だった。融資話が打ち切られれば、佐瀬が計画しているすべてのことか水泡に帰してしまう。それどころか、日興製作所は倒産の危機さえも憂慮される事態にたちいたる。しかし、ここでプロジェクトを放棄するのは、いかにも無念である。あと

一步なのだ。なんとか、興業銀行を説得できないものか、佐瀬はそのことを考えている。

「それはわかっています」

「本当にわかっているのかね」

渡辺副社長はだめ押しするような調子でいった。佐瀬と渡辺との間で激しい応酬が交わされている。

「もう少しの辛抱だろうと思う。吉海頭取には、今一度、私か筋道を立てて、お願いしてみることにします」

坂本社長が静かに答えた。

「まあ、このわたしが頼んでも、承知はしてくれまいね。しよせん、これは力の限界というものだ。無理筋の話なのだ。協定を受け入れるとすれば、早いにこしたことはない」

議論の余地はない、大竹会長はそういういい方をした。

実際、興業銀行との関係は大竹会長と吉海頭取との個人的な友情で支えられていることは確かである。その大竹会長が頭を下げても駄目だというのだから、今度こそは本当に最後通告となるかも知れない。しかし、株式や有価証券など、含み資産の一部を処分すれば、現在の経営危機はなんとか乗り切れるのではないか。佐瀬は大竹会長に試算表を提示しながら懸命に説得を続けている。

「含みとはいい、これを処分するようでは、株主に対して申し訳がたたない……佐瀬君、そうは思わんかね」

渡辺副社長が横あいから口を挟んだ。

「それに今度のココム事件。いい加減にしないと、本当に倒産してしまう」

坂本社長、あなたは株主や従業員に、そんなことで責任がとれるのですか」

渡辺副社長は勢いこんでいた。

ココム事件とは、日興製作所の子会社である日興精密機械が、五、六年ほど前に、航空機エンジン精密加工機械をソ連向けに不正に輸出したとして、ココム違反で摘発を受けたのだ。

しかし、日興精密機械の説明では、事前に通産省とも相談のうえ、ソ連との間で契約を交わしている。だからココム違反といわれても、最初はな

んのことか、理解できなかったというのが、正直なところだった。だが、ココム違反の事実を指摘、日本政府に調査を要請してきたのが、国防総省だと聞いて、佐瀬はそういうことだったのか、とうなずいたものだった。

第二次半導体摩擦が過熱化した八七年にも同じような事件が起こった。

あのときは、口浦の子会社の日浦精密機械がココム違反だとして摘発されたものだ。あのときと、状況は同じだ。明らかに日興製作所に対する「制裁」を意味している。佐瀬は、氷のように冷めたい表情をしていた田所の顔を覚えていた。

米国が外交ルートを通じて調査を要請してきたからには、通産省としてもこれを無視することはできない。先週、警視庁は通産省の告発を受けて、日興精密機械の本社を家宅捜査している。

「研究開発を放棄することは、絶対にできません。会長、これはわが社の存続にかかるといってはいませんか。それにアメリカは、国防条項にかかると研究開発は別だといってるのですよ。マーケットのシェアリングはともかくとして、研究開発を放棄するような協定に署名できないのは、当然です」

佐瀬も必死で食い下がっていた。大竹は八十に近い老人である。さすがに疲れの色が出ている。その分だけ、他人の意見が聞けなくなっている。

「技術開発は日興製作所の生命であるとおっしゃったのは大竹会長ご自身ではありませんか。私も会長の考えには同感です。わか社は技術の日興製作所なのです。しかし、あの協定に参加するということは、会長か社として定められた経営理念を放棄することを意味するのですよ、会長……それに米国がこの協定を遵守する<sup>じゅんしゅ</sup>という保証はどこにもないのです」

「佐瀬君、それとこれとは別問題だ。わが社は存亡の危機に立たされているんだ。なにを<sup>なん</sup>おいても興業銀行との関係を修復しなければならぬのだ」大竹会長は最近になって、協定受け入れに大きく傾き始めている。こうなると、役員会で協定の受け入れに異を唱えているのは、坂本社長と佐瀬の二人だけになる。大竹会長が結論を保留してきたため、どうにかバランスを保ってきたこれまでの力関係は、一気に崩れてしまうことになる。

「会長、メキシコのシンタタンクが開発中の多値論理演算LSIもまもな

く製品化できる見通しになっているのです。また、懸案となっている32メガビット・キュービックRAMも、どうにか生産ラインに乗せることができそうなのです。AIチップの開発も順調に進んでいる。協定を受け入れるということは、これらの研究成果をすべて放棄するということになるのです」

「それはわかっている。だが、興業銀行の態度は待ったなしなのだ。そんな悠長なことはいつてられないのだ」

大竹会長は憮然として答えた。

「当面の資金繰りで必要な金額は、八十七億円です。多値論理演算LSIを市場に送り出すことができれば、わが社は独占的な地位を確保できるのです。ここは暫く我慢をして、多値論理誤算LSIの開発を継続させるべきだと、私は考えます」

「われわれは君がいう、たったの八十七億円で苦勞をしているのだよ。その資金繰りにめどが立たないため、経営はピンチに立だされている。わかっているかね、わが社のおかれている現状か……」

渡辺副社長のいい方はにくにくしげである。

佐瀬は技術開発の現状、とくにメキシコに設立したシンクタンクが取り組んでいるプロジェクトの進み具合を説明しながら、興業銀行が融資継続を打ち切った場合、資産の一部を売却してでも、研究開発を継続すべきだと主張した。

多値論理演算LSIは確かに画期的な半導体なのである。現在のコンピュータに使われている半導体は0 または1、つまりオンかオフのふたつの状態（二値）の信号を組み合わせて、情報を処理する二進法となっている。

多値論理演算LSIは、二進法の半導体と違って、三つ以上の電流の強弱を調整することで、四進法を使った新しいアルゴリズムを適用、これによって演算の並列処理を可能としたほか、チップ構造の規則化と内部配線構造を単純化することに成功している。

これによって、演算素子の飛躍的な高速化を実現した。メキシコのプロジェクト・チームは試作品のテスト結果を、従来の多値半導体に比較して

計算速度を三分の一に短縮、さらにチップ面積と電力消費量を半分以下に抑えることができたと報告してきている。プロジェクトチームには佐瀬自身も参加して、研究開発を進めてきた。

いくらなんでも、これを途中で放棄する訳にはいかない。多値論理演算LSIは人工知能、知能ロボット、機械翻訳システムなどを構築するうえで、有効な手がかりになるはずだ。とくに高速演算処理を要求されるエキスパート・システム、画像処理技術などの高性能化を図るうえで、決定的な武器になる。つまり日興製作所にとっては、32メガビットのキューピック半導体とならんで多値論理演算LSIは、次世代を担う期待の製品なのである。

「しかし……佐瀬君。会社経営というのは遊びではないんだ。いくら技術的に優れているからといって、めったやたらに資金を投入することはできない。常識というものがあるんだよ、常識がね。今は経営がピンチの状態にあるんだ」

渡辺副社長はすでに勝負がついているものと判断しているのか、今度は鷹揚に構えている。そこで坂本社長が言葉をつないだ。

「ともかく、吉海頭取には、私がお目にかかることにします」

「会ってどうするといふのかね？」

大竹会長が聞いた。

「もう一度お願いをしてみます」

「無駄だと思うよ」

「吉海頭取がどうしても、だめだといわれるのでしたらそれはしかたありません、きっぱりと諦めることにします。それでいいね、佐瀬君」

坂本がいった。

抵抗も限界に来ていることは佐瀬にもわかっている。吉海頭取は通産省の意を汲んで、協定受け入れを勧告してきている以上、融資継続に興業銀行が同意するとは考えられないことだ。見通しは絶望的だった。あれこれ考えてみたが、佐瀬には次善の策は思い汗かばなかった。佐瀬はしかたなくうなずいた。

「吉海頭取がどういふ返事をするか、楽しみですなあ。まあ、もう一度、

お願いしてみるのも一案かもしれませんね」

渡辺副社長が冷たくいいはなった。これですべての問題に決着がついた、渡辺はそう思っているのか、いつになく満足そうな表情を浮かべていた。

2

問題の日米協定が成立してちょうど一年が経過していた。今日は珍しく、理恵のアパートメントに友人たちが集っている。久美子の離婚を祝う会というのが、今日の主旨である。このふざけた会を企画したのは裕美だった。その肝心な裕美が遅れているようで、まだ姿をみせていない。

久美子は陽気にはしゃいでいる。蓮田と離婚して、久美子は以前の久美子を取り戻したようにみえた。今ではコンピュータのシステム・エンジニアとして、第一線に復帰している。勤め先は小さなソフト・ハウスだったが、時間に縛られないこと、それは子持ちの独身者からすれば、願ってもない条件である。職場の仲間たちにも好感が持てた。それに久しぶりで取り進むプログラミングの仕事もおもしろかった。この世界の技術革新のテンポは目を見張るものがある。最初は戸惑いもあったが、最近ではそれにもどうにか慣れてきた。

「子供がいるもんで、男漁りがちよつと難しくなったのが、悩みかなあ……」

「嘘をおっしゃい」

理恵がからかうようにいった。どこで見つけたのか、久美子には新しい恋人ができている。子供を抱えながらも、その恋人とは結構楽しくやっているようだ。仕事と新しい恋人を持ったことで、久美子は一段と若返ったように見える。

大蔵省の官僚だった夫を亡くした美沙子が今日のために久々に上京し、みんなの前に姿を見せている。

通産省を退職し、今は外資系銀行の金融アナリストとして再出発したシオリの顔もある。通産省を去るには、だいぶ悩みぬいたシオリだったが、転職したことが結果としてよかったのか、性格的にもまる味を帯びてきて

いる。シオリはまだ、独身生活をエンジョイしている。

今日の 祝う会 を企画した裕美が姿をみせた。

「ごめん、ごめん……馬鹿な男がぐじゅぐじゅいうもんだから、すっかり遅くなっちゃった。いやねえ、まったく」

駆け足でもしてきたのか、裕美は息を弾ませている。これで今日集まることになっているメンバーは、全員揃ったことになる。

一息ついてから、裕美は理恵の方に軀を向けると小声で囁いた。

理恵は息をのんで聞き返した。

「なんですって、アメリカのメーカーが32メガビットRAMの試販を始めているんだって？それじゃ協定破りということになるじゃないの」

「そう、アメリカは協定を破ったということなのよ……」

裕美がいった。

32メガビットRAMは、日米秘密協定によって製品開発を凍結することが決められている製品である。秘密協定に参加している日本のメーカーは協定を墨守してきた。

もちろん、日本の半導体メーカーは32メガビットRAMを生産する上での技術的な問題をすべてクリアしていた。しかし、協定に調印した各社は、16メガビットRAM以上の記憶容量を持つ半導体の研究開発には、研究開発そのものを凍結する措置をとってきたのだ。それを逆手にとって米国の半導体メーカーは協定破りをやったということだ。

研究開発を一年間凍結してきたため、日本企業と米国企業との技術的格差は考えている以上に大きくなっているかも知れない。こうした事態になることを全く考えていなかったわけではないが、それが現実となってみると、やはり フォーラムX の巨大で圧倒的な力が感じられる。見事などんでん返しをくらった。これによって、日本の半導体企業の大半が大きなダメージを受けることになるだろう。理恵は全身から力が抜けていくような気がした。

シオリは、理恵と裕美の話の黙って聞いていた。

シオリには半導体とかカルテルとか、それが懐かしい言葉に聞こえた。ふっとチェンバレンのことが思い出された。産業調査員の法律顧問を解任

されてからチェンバレンはどうしたのだろうか。まだ、あのマンハッタン近くに事務所を悠然と構えているのか。その後のチェンバレンの噂は聞いていない。なにもかもすべて、あどきに終わったことだ。シオリには懐しい思い出としてだけ記憶に残っている。

やはりチェンバレンがあどとき懸念していたことが現実となった。それにしても、なんというあからさまなやり方だ。まったく日本を馬鹿にしきっている。

シオリは怒りで体が震えてきた。

協定を米国が一方的に破ったからといっても、裁判に訴えるとか、公的機関の調停を受けるとか、そういうわけにはいかないのだ。協定は 秘密協定 なのである。問題を解決する手だては当事者が話合う以外に道はない。しかし、米国が日本の抗議を受け入れるだろうか。

これまでの経緯から考えて、米国は日本との話合いを拒絶する可能性の方が大きい。

今の日本は、約束を破った相手に対抗する手段を持ち合わせていないのだ。日本にはバーゲニング・パワーはない。悲しいことだが、それが現実だった。

決定的なことは、この一年間、技術開発投資を凍結してしまったために、日米の技術格差が一段と拡大していることだろう。一年という時間はこの技術分野では、考えられないような格差を生み出すことになる。これで日本は完全に敗北したことになる。

「そうすると、あどときの日本の真の味方はチェンバレンだったということになる。じゃあ、あのロバーツ教授はどういう役割を果たしたことになるのかしら？」

シオリが呟いた。

ロバーツ教授のことが問題になるのだとしたら、野沢研究調査部長はどういうことになるのか。理恵は思わず口ごもってしまった。野沢は研究所からそのまま国際金融機関に向向している。現在はワシントンに勤務しているはずだった。野沢は協定を締結することの本当の意味を知った上で、協定締結に積極的に動いていたのだろうか。いまとなってはそんなことは

どうでもよいことのように思える。が、しかし、あの野沢はどう考えてもユダであった可能性が最も大きいように思えてならない。

あのときもう一人、協定締結に熱心に動いた人間がいた。そう、田所官房長だ。官僚の出世街道をまっしぐらに走り抜け、今では通産省事務次官に登りつめている。それにしても、あの田所がころりと、だまされたということだ。

「まあ、彼の場合は官僚としての功名心だったと思うわ。そこを巧みにつかれ、利用された。そう、ロバーツ教授にね」  
シオリが応えた。

「田所はどういう責任をとることになるのかしら……？」  
と、理恵が聞いた。

「責任……？ とりようがないじゃないの。業界だって秘密協定の締結には同意していたんだから」

シオリが怒ったようにいった。

「それにしても、結果からみれば皮肉なことになったものね。最後まで愚直な抵抗を試みていた日興製作所に、これでツキが回ってくるんじゃないかしら」

確かに裕美のいうとおりかも知れない、理恵はそう思った。

日本の半導体企業のなかでただ一礼、カルテルから脱落することを決意して、独自の道を歩むことになった日興製作所は、一方で長期裁判を抱えながら、他方では研究開発の舞台を米国からメキシコに移して米国の一流研究者をシンクタンクに結集し、次世代の半導体素子の研究開発を懸命に進めていた。当然のことだったが、日興製作所に対する風当りは強まっていた。

行政の側からの圧力が強まり、ユーザーも日興製作所から離れていく。銀行団も金融上の締め付けを強化していた。資金がどこまで続くか、それが勝負どころだった。日興製作所は苦境にたたされていた。倒産の危機さえも幾度となく囁かれたことがある。

確かに日興製作所は経営危機に直面している。内外の締め付けに、どこまで耐えられるのか。今朝の新聞は、主力銀行の支援も思うように進展し

ていない、と報じていた。

「しかし、米国が秘密協定を破棄したとなれば、まったく事情が変わってくる。銀行も態度を変えて日興製作所に対する支援を再開するのではないか、私にはそんなふうに見える」

シオリがいった。

それはありうる話だ、と理恵は思った。米側が協定を破棄したのだから、半導体産業は再び戦国時代を迎えることになる。そこで優位に立つのは、協定に拘束されずに、技術開発を懸命に進めてきた日興製作所なのだ。だとすれば、興業銀行か日興製作所に対する態度を変えてもおかしいことではない。米国が秘密協定を破棄したことで、逆に日興製作所は救われることになる。裕美が「皮肉なことだ」といったのはそのことを指している。

噂によると、日興製作所はすでに16メガビット素子を生産ラインに乗せることに成功しているらしい。それに開発中の多値論理演算LSIは画期的な技術だと評価されていた。しかも米国に比べて格段に安い値段で供給可能だという。新しい概念で設計したという32メガビットRAMについても、社内で秘かに生産ラインに乗せるべく、試作が行われるともいわれている。日興製作所は同業他社を大きくリードしている。その意味で日興製作所は磐石の技術の基盤を築き上げていた。米国とも互角に闘える力を持つ唯一の日本企業ということになる。

それにしても、内外の圧力に抗してよくここまで持ちこたえたものだ。佐瀬のあの精神力にはほとほと感心する。集中攻撃の包囲のなかで、あのふんばりはとても並の人間ではできまいと、理恵は思う。

「これで社長の座を棒に振ることになるかも知れないね」

佐瀬はそんなことをいって笑ったことがある。確かにこの数ヶ月は厳しい情勢にあった。

最も重大な打撃は通産省の意向を先取りするかたちで、主力銀行である興業銀行が融資打ち切りを通告してきたことだった。経営が悪化した主な原因は協定の署名を頑固に拒絶しているため、国際市場から日興製作所の製品が排斥されていることにある、興業銀行はそう判断していた。もう、抵抗を続けることは限界かも知れない、佐瀬はそんな弱気なことを口にする

ることもあった。

しかし、耐え続ける佐瀬の作戦は見事に成功を収めたことになる。米側が協定を破棄することで、協定に忠実だった同業他社が窮地に追い込まれるというのに、日興製作所の経営危機は救われることになる。

「あなたたち、なにをこそそとしているのよ。そういうことだから優等生は嫌われることになるのよ！」

美沙子がシオリに向かって、非難がましい言葉を浴びせた。もちろん、本気になって非難しているのではない。シオリがちょっと困った顔をしている。いつになく硬い表情をしているシオリに、美沙子は少し驚いた顔をした。シオリは言葉を続けた。

「でも、私たちいつたいあのワシントンでなにをやってきたんだろう？ すごく必死になってなにかを追い続けていたように思っていたんだけど……」

理恵がうなずきながらいった。

「あそこで体験したことが、男たちの世界のすべてだとは思わないけど、その一部を覗きみたことは確かだと思うの。でも、半導体をめぐる日米の確執が、結果としてどうなるうとも、この地球上に住んでいる大半の人間にとつては、ほとんど意味のないことのように思える」

「男たちとて、結局、同じことではないかしら……ただ、当面の危機は人間を熱くさせることだけは確かなことのようなね。だから男も女も懸命に走り続けるのね、きつと」

と、裕美がいった。

「たいていの男はだらしがないけど、すごい男もいる……たとえば、佐瀬さんみたいな人……」

シオリも佐瀬に対する思い入れがあるためか、そんなことをいった。

「男にできることは、女にもできるということ……それを体験できたことの意義はあるわ」

裕美が答えた。

「そういえば、私たち燃え上がったね、あのときは……」

そう、確かに理恵がいうように、ビジネスや政治の世界に頭を突っこむ

ことで、緊張した日常を送ることができた。充足できる日々だった。それにしても壮絶な闘いをかいまみた。

シオリは淡々とそんな意味のことを話していた。シオリの話し方には実感がこもっている。

「あなたたちは贅沢ね」

「そうかしら……？」

裕美か久美子に聞き返した。

「そう、贅沢だわ。私なんか蓮田の拘束から解放されただけで、十分に満足しているもの。仕事の中身を議論するゆとりなぞありはしないんだから……」

そういう久美子の自己認識は、すこし違っているように理恵には思えた。

「結局、日本の半導体企業は米国の軍門に降ることになるのかしら？」

久美子が誰に聞くでもなくそういった。

「それが謀略であることかわかっていたとしても、闘いに敗けた以上、アメリカに屈服せざるを得ないでしょうね、いまは……」

シオリが答えた。

「でも、日興製作所が残っている」

理恵がいった。

「今度は日興製作所を標的にして、アメリカは闘いを挑んでくる、そういうことになるのかしら……？」

裕美が口にした「闘い」という言葉に、理恵は強いリアリティを感じた。

「この闘いはエンドレス・ゲームだと、私には思えてくる」

シオリはそう応えた。

「エンドレス・ゲーム……ね！」

そうなのだ……まだ、闘いは続いているのだ。フォーラムX は標的と決めた日興製作所に、次はどんな罠を仕掛けてくるだろうか。それに対して、佐瀬はどのように対抗するのか。

佐瀬ならば、果敢に立ち向かっていくことをするだろう。理恵には確信をもって、そう思えた。

(完)